篠田久次郎編

鹿兒島戦爭記 七編

A430
6

廉児島

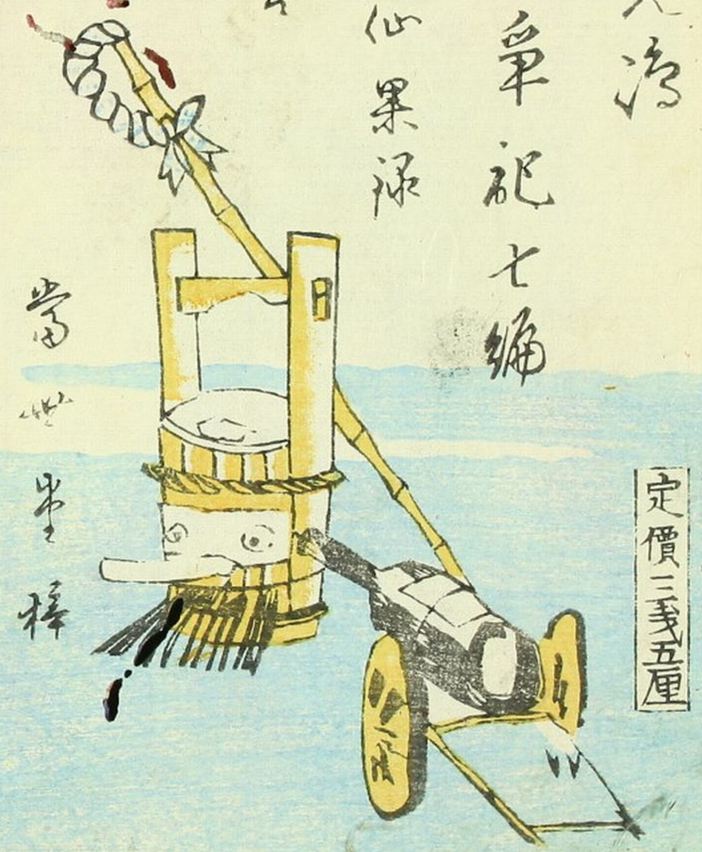
戦章記七編

仙果編

方園舎

清叔

惠



定價三錢五厘

廉児島戰章記七編

東京　篠田仙果編輯

時いつるぎ

明治十年二月二十八日廉児島暴徒のそのうちいくも今張本とよばれる勇猛名代の村田三郎ハ五百人を率ゐる熊口の皮軍とおぶくんと

大坂福島近辺湊兵等

二夕色ホ

48-7874

たげ者く対撃ひしられば廣徳勢進ませんと
ぬ村田三助潛くるこゑとふりえて
加りどの故ふさうくられ進むことのみふざるとゝ
云甲斐なきめんくなる戦ひに好するものぞと
落ぶるをすゝめ枝につけと孤出し
指令の大刀ひらめきし強毒云の真ぐ中へ
ドッとぞうに切入て四角八面ふあとまろる
暴徒等これ所まさるを見来る弾丸の下を
ぐ〻と蘆ア造りの刀をうちふり五二五ゑ
切り入るゆどて大坂福島強毒云うれ見に
ありられば近傍を入くうり統槍と中ふかまへ
抜刀隊をあせつけぎ者ぐうく

奮戦ずいるが村田三助
組一人味方にたゝまと
故落まのり
るを卍巴の
どうく奈ゆ
く

各所ニテ砲戰ス

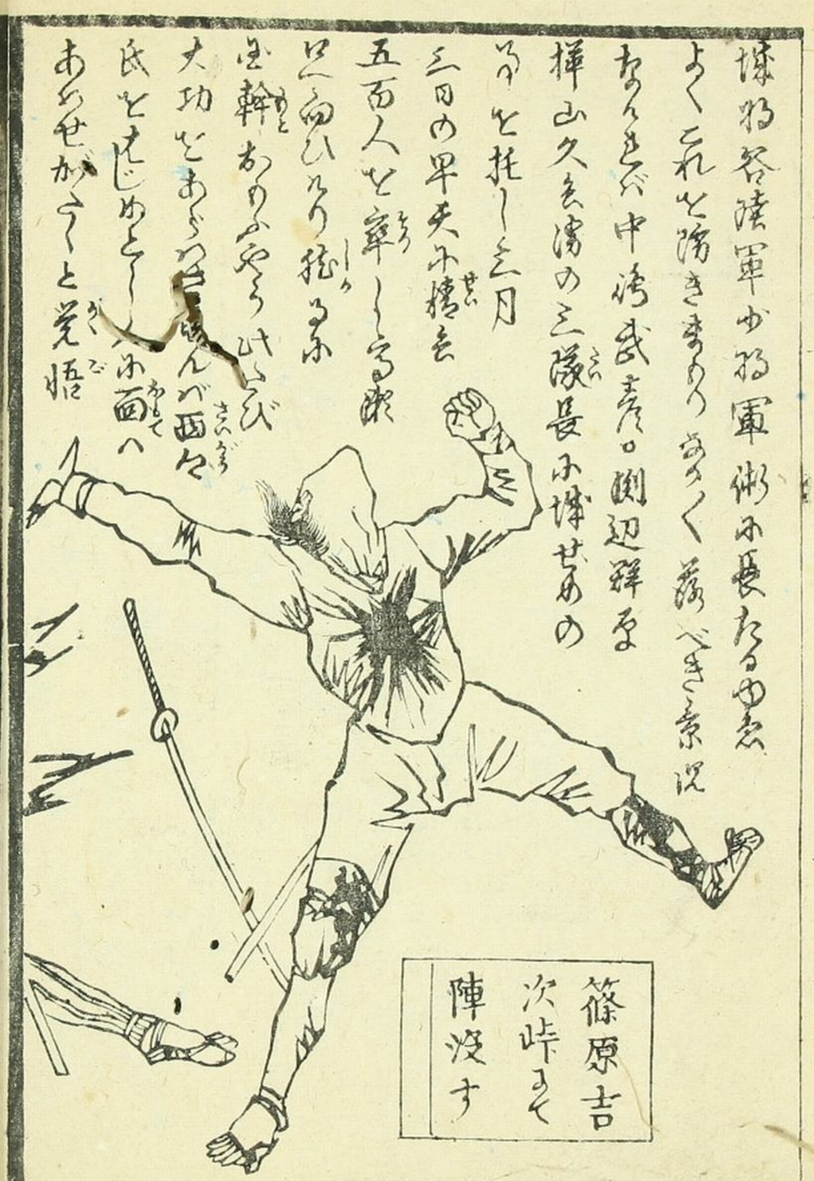
八方へ繰てまろう敵あなさ付れるが
その内も数ケ所小筒ふうちねを経よ
付死ぬ〜るあそ累俵い大ひふ乱を
あとし二ぬの乱をいとかつき
ちろくふ引あげたり

○二月一日ハ各所共休戰ふて同二日▲

▲早朝より山麓口に戰ひ
迫まり南の間に治体
門扉をとる砲戰ひ
廉兒徳方に於て玉薬

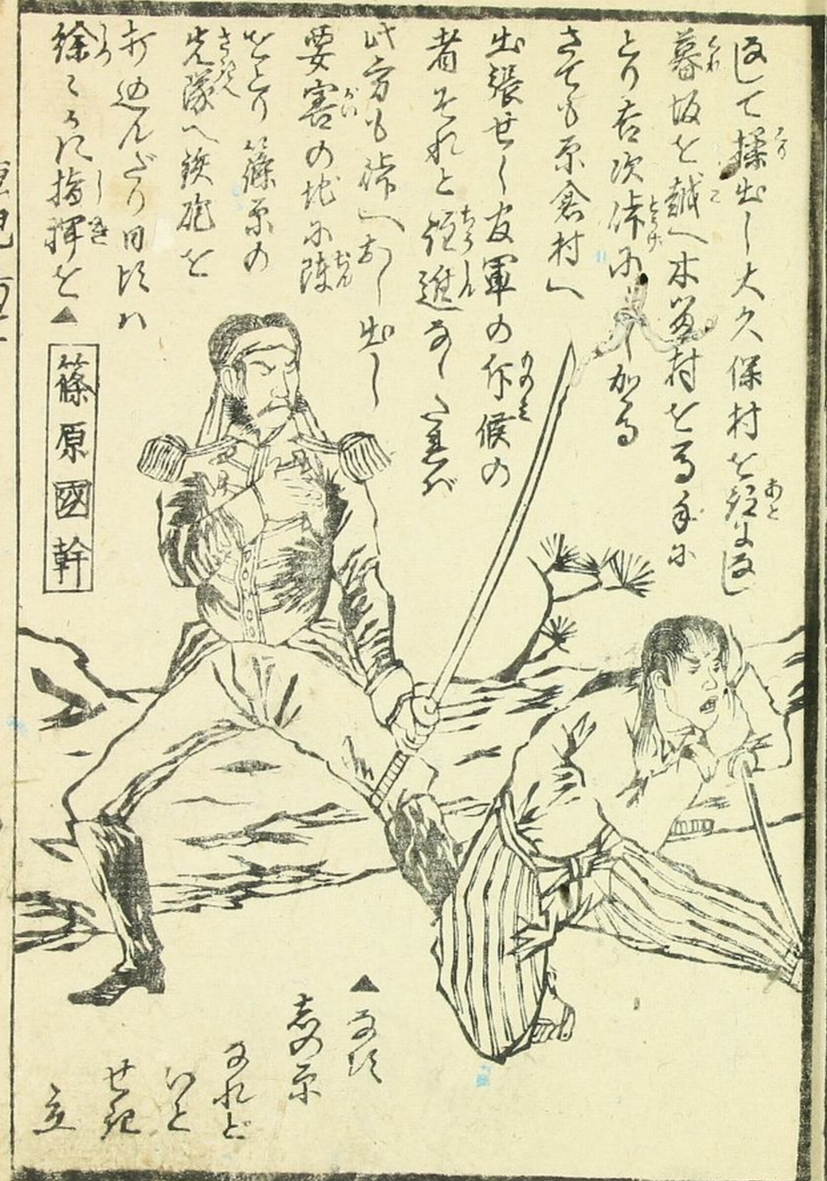
十分あらねば戰ひ
中間とあらばきは
刀とあつて切込む
敵軍もとれふ射〜
巡査と撰て抜刀隊と
力戰をぶく
ありに
けり
彼又篠原
国輔ハ
態を悔を
破らんとをへく○

◑激戰



篠原吉次峠を陣没す

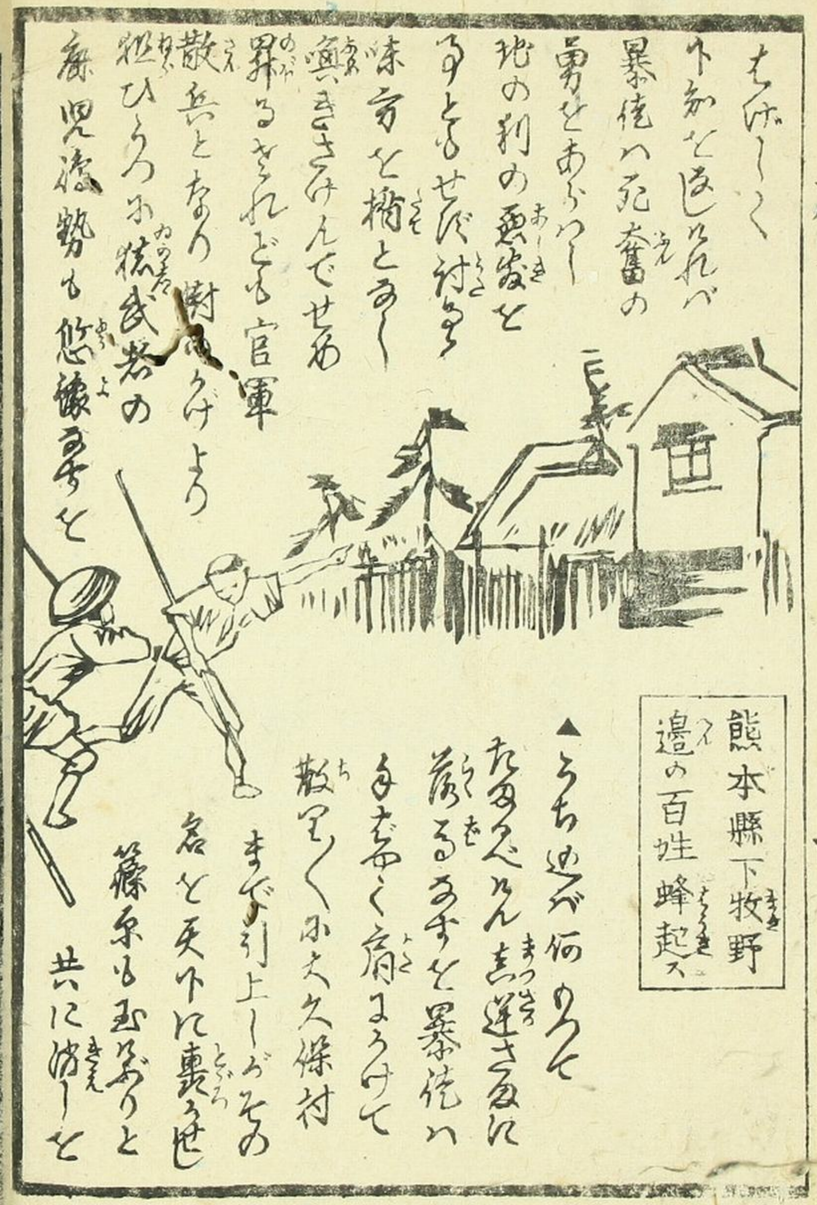
據羽咎陸軍少将軍御ふ長たるゆえ
よく戒を守きまもりまもく蔵べき京況
あるべき中将武秀。関辺鎮を
揮山久長清の三隊長ふ據せるの
ゆを托し三月
三日の早夫ふ搦を
五百人を率し宮瀬
口へ向ひ拠ふ
出軍ありふ
大功をあらわ[illegible]んが西々
氏を[illegible]めて[illegible]ふ面へ
あらせがうと覚悟



篠原図幹

▲長高京

撰て揉出し大久保村を経よ
暮坂を越へ本多村を
ゆ吉次峠ふかる
さそも京倉村へ
出張せ皮軍の作候の
者それと領道を
此方も作へ出し
要害の地ふ陣
をとり篠原の
先隊へ鉄砲を
打迎んゆ日比い
徐くに指揮を



熊本縣下牧野邉の百姓蜂起ス

▲うちはてゝ何のうらもなくたゞ人民の迷さるに驚るるまゝを暴徒いよ〳〵高くなりて散乱し久保村まで引上しゝその名を天下に表せ篠原氏も恐縮と共に消し

篠原氏へ会せるや踊らせ刀をうちふり阿修羅王のあれたる如く東西へ切及びけれゞ家ハ家なき町ゝ迄そ紀しゝ一ツの弾丸とび来り篠原氏が掴ゝとドウとぞろり▲

暴徒の本営

久米の[illegible]

篠原が
髪の毛と
薩児島の妻子
の許へ持参して
義式をねんごろに
とりあつかひける
○廿五日山縣口右次
戦ふこと激しく戦ひあり

勅使柳原君
鹿児島江着

同日熊本城下一大面
牧地辺の面地とも凡八百人
ばかり陣所・幕舎を押立
竹鉄鎖沙嚢などを拵へ
面戸口の宅を破却し丸腸と
なりたり
○三月六日七日とも田原坂・右次戦。
本の茶町・二本木の四ケ所合戦
ありたるが篠原大依繰丸の
傷をうけられたり
○七級の暴動に付薩四藩の藩士
父子へ勅使として柳原前光君薩州へ

四藩藩の
花候黒田
長門田清左衛
薩摩の藩
津軍家の
家老たる

勅使御原君
黒田
黒田中将
中将安田閣
拓殖大臣死去
外数員去士巡査数百人
これを守る護衛
交代兵の二艦を搭ず

▲藝親隊の一組へ
長州人逆襲
ありしに
かれ
きすがごとくせ
大砲ふりまし
さらに起天も
無せ
大の風苦
いたるなり

春田艦を生捕りとして二月八日前の浜へ
着せる長崎兒島を探偵の上入港す

島津父子

和成四十一回上陸して偽情
久光公父子へ勅命をつゝ
られ先に学校生徒のため同所の
獄屋へつゝまれる
と定めその余の人々を安元同所
薩軍深業造所を處分し大山
綱令と同所なる柳原君は
黒田中将へ廉四人偽り
○又西京行五百二品伏見の人西郷隆盛
を命ぜる長崎に出発あり○三月十三日▲

豊後路を向ひ
巡査大雪を苦

三月十三日
疾もいるぐ▲

▲明るきに四方坂口の

▲十四五人うち例の
統率を組
代る〳〵
多作えい
よせつけず
とめ打巡査の
抜刀隊いろれも
うで安めきく
人〳〵十名と一手を

賊兒馬二

賊軍い鹿児
島方の堅塁を
抜んと
ひ
ぬ花発色る
あそ暴徒らも出るとこ
防戦をする中一団あまり
松ふ城の抜刀隊い戦ひの
ぶとをかうり二三十人切込ん
ぶりこは先刀先家業く賊軍も
これがあめふ出るまんと手をとそ
新潟会入うりの鉄砲ふ統率をつけ
中隊ふとれとかるく一団ま狙撃隊▲

不京ふ対てかつ〳〵ゑび薗四郎勢も
初さそらを巳五十同志りぞけば戦ひあ
猪野ぞこの巻を抜き出し進うちせく
進めくと伍長の指令ふ巡査の勇気
日ごろに倍し田原坂とせめのぼり
抜木衛及雷伝さ〜い
のめとまで隊をうり
ゑんだりさ日の戦ひ
あるとる激〜く
第代朱写め
ゆとるうり
翌十五日午芳五同ぞう

両陣の抜刀隊
大ひふ激戦ハ

巳薗巳出張せ〜
援軍山内安軍
と薗巳猪野
不京ふ〜〜せ
一巳巡査場を
うむひ〜〜巡
査九午芳ぞ
二をにころれ切入て
忍ち巡査場を元戻せう
十六日巳薗口の安軍ハ岩村
ゆう巳野原と就車逆坂中
途へうぞせ〜その打〜れた右の

暴徒夜うちの
支度をする

數より伏勢起り
ひらちふうち
立らるすそぶる
若武をとりけるる
その夜山縣
の
薩兒島勢
夜うちをうけて
賊軍の勢ひをとり
ひしゝんと人數九二百人程
その夜に及びるる
鹿兒島戦爭記七編終

明治十年四月四日出版御届

編輯人 篠田久次郎
第五大區七小区
下谷上野町
十二番地

畫版人 杉浦朝次郎
第五大區一小區
淺草茅町一丁目
十六番地

篠田久次郎録

鬼島戦争記

八編

大友朝次郎

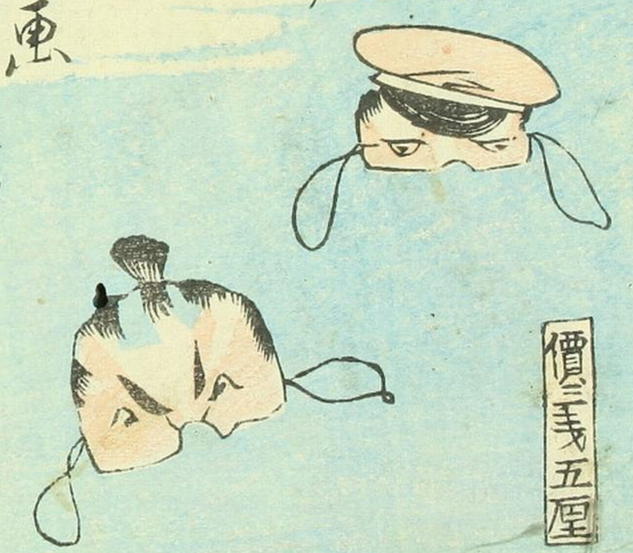
薩兒島戦爭記

八編

篠田仙果録

小林清祝重

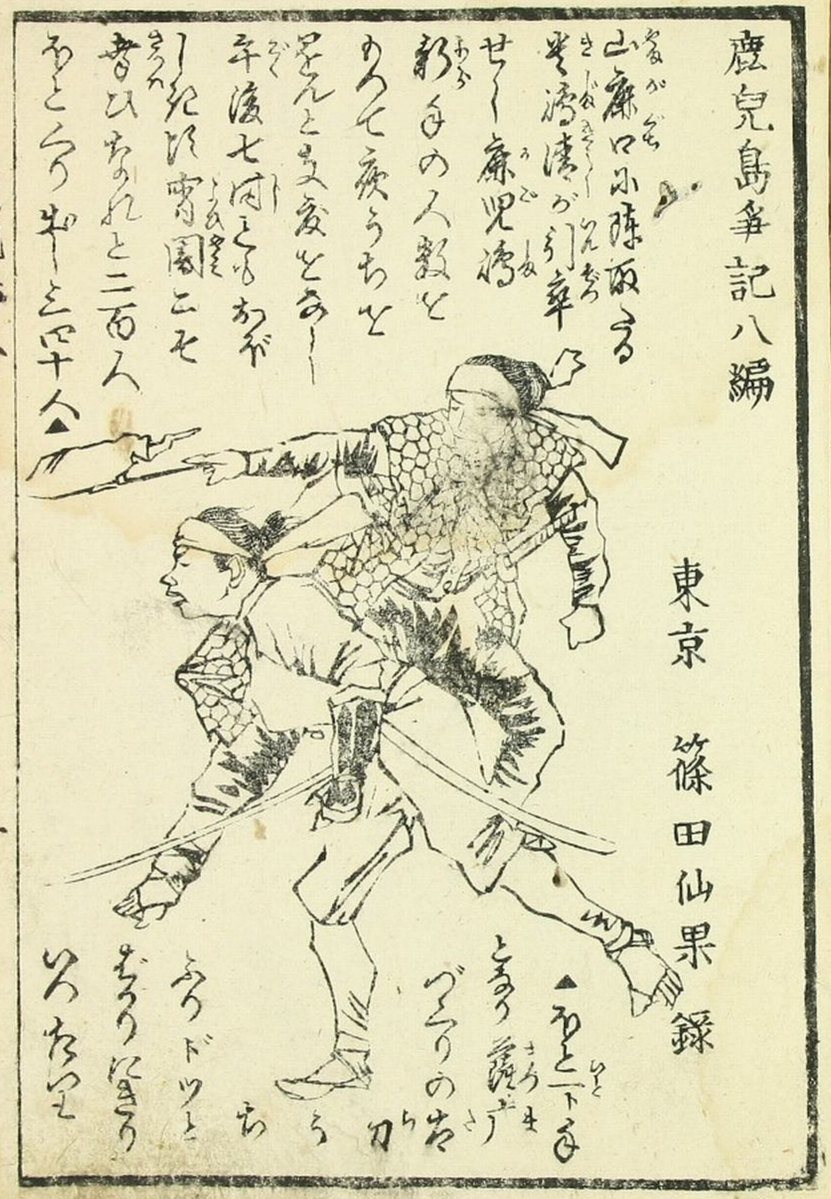
當世業樣



價三錢五厘

薩兒島戦爭記八編

東京　篠田仙果録



そもそこなるよう
近清云へ剛叫とあいて
急と斬りかせ後ろと
立ちかかるとも
官軍ぐこ二の墨
場と固めたる云
奉いか云とうこと
とあれば防ぎこで
なるなおくあるうちと
こぐれ文と暴徒へ向うと
統長撃ゆせど
晴さへらじ

官軍の
統長
の
指揮
大山か
友軍
こぐうち
指令の
翌と撃
云辛
さつの
あり
拙なる
所くの

土地あれ
国士対とも
せーとえん

墨場より
撃ひの云
をあつれ
よと
報ず
とと急
あれた
そきく
たれ
ふろ
あり

経ふ夜行を
渡ぎしが中
にも近藤云
東京鎮台
小倉云
ハ功名
とあり

一二月
四月十六日山縣
口なる岩村の
官軍ハ長州
京の外もなる

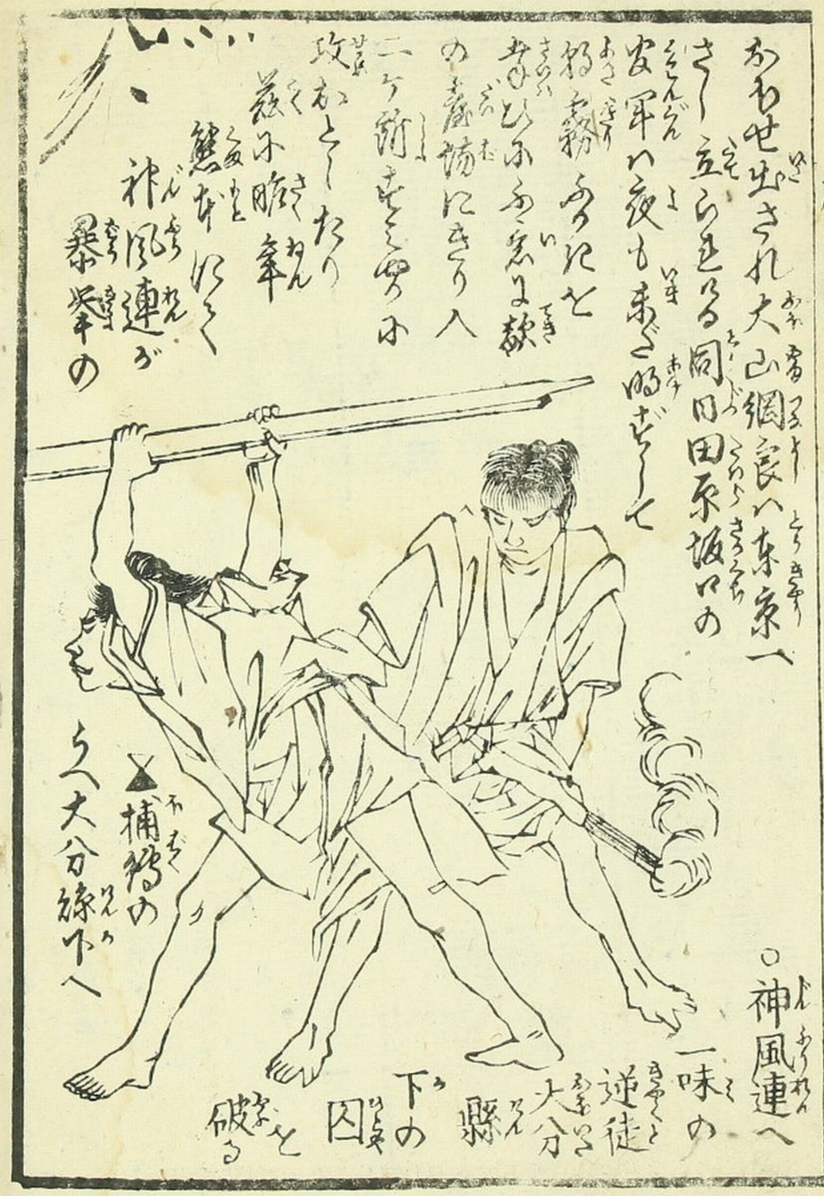
▲長谷云死傷の
数をあらはして
このところを
引上られど
死傷の

車返し坂の砲戦

車返し坂まで
行軍せしに
左右の林中
樹林のうちより
人数の多少ハ
分らざるが
山縣兵隊方の
伏勢あり
狙撃を受て
いとまげしく
官軍ハ大こまる苦戦
東京小倉

負けけり
同じく十七日
山縣兵隊嫁合
大山綱良の
官軍ハ後備隊
のむ

かわせ出され大已綱長ハ東京へ
さて立ち出る同日田原坂口の
官軍い夜も未だ明ざるして
相森ありたと
者ひとふ所より敵
の意物にきり入
二ヶ所にて官ハ
攻かたりたり
義ハ暗幕
態なりけり
神風連ゞ
桑峯の



入宰さ色ざさ之の事件を獄に
き囚徒らゞれるを徒とする宰
屋敷ハ火を放ち暴徒又
たくひたりとて

▲老
後の玉の
者どゝ
一味にて
乱場せり
四十三人

同十九日

玄武丸

田冬二軍艦大船ヲ以て
玄蒙と玄武丸技素丸ヲ
の屯長崎を出帆し
丁卯艦ハ天竹へ
玄蒙と玄武丸技素
丸林素門丸ハ
同玄久沖より陸
の巡りすと等とあるヲ
人数の多ハいからねど
此処彼処ヲ麻児湾
勢屯集ヲ呼び紅と

ヲ也て大砲を速発し巡査
の抜刀隊ハ烏紅ヲのりて頂ハ
村へ上陸し麻児湾勢ヲ討て
かるるヲ急なれば暴徒等
流血と敵を目ク敵と擬
ヲ刀と接ス敵ハ
戦ひしヲ沖より暴徒の
陸中へ発せし大砲あや
まち流弾某等へ
当たるべ何ヲ仮て
多くき合某一団
ヲ激発し暴徒ハ

数名微塵と
なりぬとれヲ
髪ヲ紅残りし
ものとぞ

人吉の方へ
敗くれ放
走せり
同日捷木隊
より二隊同
じく戦ひあり
廿日い夜の引あけ
より小雨ふりて
降出すると植
木にの皮軍い
吉と戦。田原坂
の要害の地よ

▲合茶い湯ぐされど暴徒い
先迎筒あるぞ合茶ちめり
て火うろう悪
しくそれ
風
苦
▼
ちるぞ
しく
皮軍い
ゆうり
ゆ
と

云と金近湯大坂福島
等二隊よりすすめ方り
麻児陽熱い雨天曳戦ひ
いあり色と泥砂せ
ぐ大ひに警戒
且皮軍の
後援い元迎あれば
▲天まる

木者へ
乱入へ
暴徒の迎
火とまる

年後二月中旬
たゝかひさゝ
ぎ
右出羽築立る
奈良沢の絵
壁い
かゝくちり
て防ぎけり

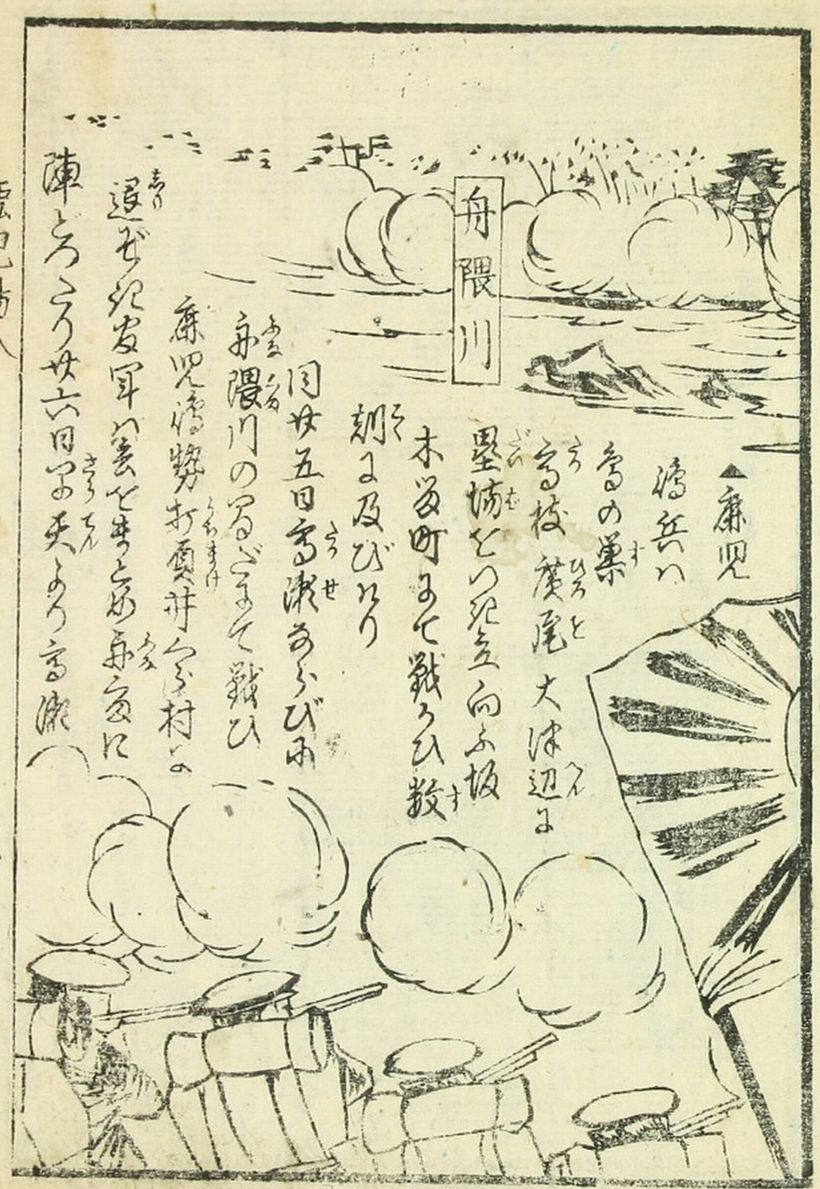
同廿一日年番九月より

田原坂口ハて巡査の抜刀
隊ハ二番二ハ奈良沢の
の塁坊の内に切入り
ありる木異法い入りる
新手の云のあらされば
紙見ハ身体ハ
ハい絲猫ハ
光ハ
二十二日山奈口ハ法れる異法い
云と二タ手ハ一手い隈府まで
一トあい極本御座と引揚られば

官軍もげしく迫るも臣ろ
同日午後四時ころ八代口い後町宮の
糸ホ知らて戦ひを開きしが迫ろ返れろ
傷級ろ世代日も西山ろかたぶけば
互ひ軍をとゞめろ
二十三日も不知ろ戦ひを始めしが
後町の方い官軍勝利ろて薩兎
湾才二十余人を付知ろさて宮の糸
の戦ひい相壮利壮自ろ多ろ出し
多ホい書状四尺程ろを持見ゆて
味方に下知を臣先ろを以て
戦ろしめ一ト合い

霧ろ小間左
を出ろ糸
忘ホ
官軍
の脅後
ホ出撃を
付ろ臣
ろれば大ひホ
苦戦ろ
たれど勇
猛名代の
を清隊い

散とあり樹のうげゝゝうらと
滅しく狙撃あしらしろの
墨流をうひ止めう年後田村
たゞひにまうそれきり
廿四日小原の小ぜうあひ
植木除。吉
次涼ハ義和
勝敗決せず
田ちう坂の



▲義兒
信兵い
雪の巣
雪枝 筑尾 大津辺ま
堅城をつれ立向ふ坂
木曽町まで戦ふ数
朝より及びうり
同廿五日雪流あふびま
永隈川の雪ごまで戦ひ
義兒信勢折柳井ふ村の
退ぞれ安軍ハ義と手ふ永谷に
陣とろう廿六日つの天ようう言流

鹿児島戦爭記八編終

明治十年四月四日出版御届

編輯人 篠田久次郎
第五大區七小區
下谷上野町
十二番地

出版人 杉浦朝次郎
第五大區一小區
淺草茅町二丁目
十六番地

010190510323

大友朝次郎